様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年４月２８日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０７２００４７
研究課題名（和文）　検閲台本による大正期浅草オペラの上演研究

研究課題名（英文）The study of Asakusa Opera based on the censored librettoes

研究代表者
中野　正昭（NAKANO MASAAKI ）
明治大学・文学部・兼任講師
研究者番号：４０４０９７２７

研究成果の概要（和文）：本研究では、大正期に流行した浅草オペラがどのような舞台だったかを、オペラ座の検閲台本を基に考証した。従来、浅草オペラは西欧オペラを〈簡略化〉したものに過ぎないと考えられてきた。しかし、上演台本を調査・分析した結果、実際には、台詞や場面を新たに書き加えたり、興行法に従うために一つのグランドオペラ作品を複数回に分けて上演するなど、当時の日本の観客が既知の演劇文化の文脈の中で享受できるように工夫を凝らした、日本独自の演劇として〈再構成〉されたものであることを、具体的な作品の上から明かにした。

研究成果の概要（英文）：This study is the historical investigation of the stage of Asakusa Opera, on the censored librettos. So far, the stage of Asakusa Opera was thought to be the simplified version of the original stage in Europe. But, the result from this study, the stage of Asakusa Opera was reconfigured as a uniquely Japanese musical play, for example, the Asakusa Opera writer add to new dialogues and scenes because the theater audience could enjoy it in the context of the Japanese culture at the time, or the actor divided a Grand Opera into several scenes and played one scene on one stage for to keep the law.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	500,000	150,000	650,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：演劇学、日本近現代演劇史
科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：浅草オペラ、ミュージカル・レヴュー、音楽劇、大衆文化

１．研究開始当初の背景

大正期に流行した「浅草オペラ」は、日本に於ける西洋のオペラ・音楽劇受容の歴史において、大衆文化としてそれらを受容したという点に特徴がある。これまでの研究では、浅草オペラは西洋の舞台を直輸入したのではなく、大衆層向けに上演するために、また当時の興行法に従って音楽面や内容面で様々な改変・省略があったとされてきた。時に浅草オペラは西洋オペラの粗悪な「簡略版」に過ぎないという意見もあった。しかし、台本などの一次資料の大半が大正 12(1923)年の関東大震災で焼失したこともあり、実際に浅草オペラがどのような舞台だったかは具体的に把握されてこなかった。

また近年の文化史の分野では、西洋文化を手本とする輸入・移植の近代化ではなく、各国独自の近代化の過程、近代国家の形成の重要性が認識されるようになっており、演劇・芸能の分野でも、たとえば浅草オペラのスター高木徳子を扱った曽田秀彦『私がカルメン―マダム徳子の浅草オペラ』（晶文社、1989年）のように、浅草オペラの中に日本芸能の近代化の特徴を読み取る試みがなされている。

こうした研究状況に対し、研究代表者は平成 19(2007)年に浅草オペラで活躍した音楽家・小松耕輔の遺族宅から、東京オペラ座に関する新資料を発見知ることができた。特に実際に使用された検閲台本の発見は、当時の舞台内容を示すとともに、公権力による作品への削除要請の内容を把握する上で貴重な資料である。そこで、この検閲台本を基にした大正期浅草オペラの上演研究を計画することにした。

２．研究の目的

本研究課題は、研究代表者が、浅草オペラで活躍した音楽家・小松耕輔の遺族宅から発見した東京オペラ座関連検閲台本を基礎資料に行うものである。浅草オペラの現存する台本はこれまで雑誌掲載など活字になったものを除いて殆ど確認されておらず、特に小松耕輔旧蔵検閲台本の場合は、検閲台本である点、『椿姫』(プッチーニ作、若松美鳥翻訳。若松美鳥は小松耕輔の筆名)、『ファウスト』（グノー作、若松美鳥翻訳）などグランド・オペラが含まれている点で貴重な資料である。これら小松耕輔旧蔵検閲台本を基に、本研究課題では浅草オペラの上演がどのようなものだったのか、その具体的な姿を明らかにすることを目的とする。

そして、研究の姿勢としては、従来の音楽学や演劇学の研究が西洋オペラの再現性を主たる評価軸にしていたのに対し、本研究では日本芸能の近代化の独自性という観点から再検討し、西洋オペラの粗悪な簡略版に過ぎないとされる浅草オペラがなぜ大正期の人々の熱狂的な支持を集めたのかを文化史的領域から明らかにすることを目的とする。

また浅草オペラに関しては、国内の諸機関に於ける資料の所蔵状況などもまだ充分に把握されておらず、各機関での調査と情報の共有も併せて行うものとする。

主な検証・分析は次の二点である。

（１）浅草オペラは、当時の大衆的観客の嗜好や演者の技術力などを理由に、オリジナルからの改変・省略があったとされるが、それが実際にどのようなものだったのかは充分に解明されてない。観客の嗜好や演者の技術力の内実を具体的に把握し、それらとの関係から作品上にどういった改変・省略が行われたのか、そしてその結果として当時のどのような評価があったのかを、検閲台本と当時の浅草オペラ関連雑誌から検証し分析する。

（２）浅草オペラの上演は、通常の「劇場」ではなく「観物場」と呼ばれる見世物小屋に準じた建築物で行われるのが一般的だった。観物場での興行は「観物場取締規則」により、台詞を発する演劇類似行為は禁じられていたとされる。同取締規則が浅草オペラ上演に与えた影響がどのようなものだったか、特に当時の風紀取締との観点からどのような検閲削除があったのかを台本上から検証し分析する。

３．研究の方法

本研究の研究方法は、関東・関西を中心とする諸機関での資料調査、検閲台本及び収集した資料の分析を基にするもので、具体的には以下の四つの方法を実施した。

（１）諸機関に於ける浅草オペラ関連資料の所蔵状況調査

図書館、博物館など諸機関が所蔵する浅草オペラ関連資料の情報はこれまで共有されておらず、また一部機関では所蔵情報の外部公開がなされていない。本研究課題では年に数回の地方調査で、諸機関に於ける関連資料の所蔵状況の調査・発掘・情報共有を行うことにした。主な調査機関としては台東区下町風俗資料館、民音音楽博物館、早稲田大学演劇博物館、国立音楽大学、東京芸術大学、大阪音楽大学博物館、財団法人池田文庫などである。

（２）浅草オペラ関連雑誌の収集と大正期の観客、浅草オペラ関係者の意識分析

大正期に発行された浅草オペラ関連の主要雑誌としては『オペラ』『オペラ評論』『歌舞』『花形』の四誌がある。これら雑誌は、大正期の観客と浅草オペラ団の意識を知ることのできる重要な資料だが、このうち前三誌は関東・関西の主要機関でも充分な所蔵がない。そこで本研究では各機関の欠本状況に併せて必要な雑誌を収集し、体系的な分析ができるように努める。

これら雑誌を通じ、小松耕輔が脚本部に所属した東京オペラ座の公演活動の把握、浅草オペラの中での東京オペラ座の評価と位置づけ、小松耕輔の同時代の評価、作品に対する各観客層（西洋音楽研究・実践者、学生層、庶民層など）の評価を主に分析する。

（３）小松耕輔旧蔵の検閲台本の分析

小松耕輔旧蔵検閲台本を通じて、西洋のオリジナル作品からの改変・省略などの異同、翻訳に於ける特徴（口語体・文語体の別、韻律など）、演技者の技術力（レシタティーヴォの有無など）を中心に浅草オペラの特色を分析し、従来「西洋オペラの簡略版」とされていた浅草オペラへの評価を再検討する。

（４）興行法の調査・分析

検閲台本に見られる削除個所を通じて、当時の浅草オペラに対して実施された検閲内容を分析する。またこれらの検閲をはじめ浅草オペラは観物場取締規則に従い様々な変更を余儀なくされたと言われている。内容その他、人物造型、衣装など、検閲台本の上から当時の興行法が浅草オペラの上演に与えた影響を分析する。

４．研究成果

本研究によって得られた研究成果は主に以下の四つである。

（１）浅草オペラの上演内容を検閲台本の上から明らかにした

東京オペラ座検閲台本『ファウスト』（グノー作、若松美鳥翻訳、大正８年４月浅草日本館で上演）、『椿姫』（プッチーニ作、若松美鳥翻訳、大正 8 年 11 月浅草日本館で上演／大正 10 年 6 月兵庫及び京都で上演）を基に、従来不詳部分が多かった、西洋オリジナルから浅草オペラへの改変・省略がどのようなものだったかを、具体的に明らかにした。特にレシタティーボの省略に関しては、従来指摘されていたように完全に省略されることはなく、またその省略が演者の技術力だけでなく、地域ごとの興行法の相違に拠るものである点などを明らかにした。

（２）日本人キャスト、スタッフの手による最初グランド・オペラ上演の特定

これまでの説では、浅草オペラが複数回に分けてグランド・オペラの全幕上演を行ったのは大正 10(1921)年の根岸歌劇団が最初だとされてきたが、実際には大正 8(1919)年の東京オペラ座『ファウスト』がその最初の物であること、そしてこの『ファウスト』上演が、日本人だけの手による最初のグランド・オペラ上演であることを複数の資料から明らかにした。

（３）地域ごとの検閲基準、興行法基準による上演内容の相違

プッチーニ作『ラ・トラビアータ』を翻訳した『椿姫』（大正８年・浅草上演、大正 10 年・兵庫県、京都上演）に関して、地域差や劇場規模などによる改変・省略の相違、地域ごとによる脚本検閲による削除個所の相違を明らかにした。特に観物場取締規則により浅草が他の地域に比べて検閲基準及び舞台装置などの外的機構に厳しい制限下にあったこと、一方関西地域は舞台機構に関しては緩やかだったため衣装など豪華なものを使用できていたことを明らかにした。

（４）浅草オペラの演劇性の評価

西洋オペラの簡略版だとされていた浅草オペラだが、実際にはセリフを口語体、歌唱を文語体とし、オリジナルにはないセリフや場面を追加することで演劇的要素を強調するなど、西洋事情に親しくない当時の観客が享受できるような娯楽性と芸術的な音楽性の両面に配慮する様々な工夫を行っていたことを台本から明らかにした。また浅草オペラ雑誌から、当時の観客が、そうした演劇性を加味した浅草オペラの独自性を評価し、時に来日した本場のオペラ団よりも高く評価する場合すらあったことを指摘した。浅草オペラは、従来言われていた「西洋オペラの簡略版」ではなく、演劇性を重視した日本独自の音楽劇として、全体的には同時代人に肯定的に享受されていたと見なすことができる。

そしてこれらの成果は今後の浅草オペラ研究及び国内の音楽学・演劇学研究に以下の三つの波及効果を持つと考えられる。

(a) 浅草オペラ研究に於ける上演の実証的把握

これまで通説的に語られていた、浅草オペラ上演の内容を具体的な作品に則して実証的に明らかにし、資料と分析の両面で今後の研究の促進へと結びつけた。

(b) 浅草オペラ研究に於ける浅草オペラ団「オペラ座」の再評価

これまで浅草オペラの評価は、大正 10 年以降に活躍した、浅草オペラ団の中では後期

に属する根岸歌劇団を主体に考えられていた。が、日本人だけの手によるグランド・オペラ上演を初めて実現するなど、中期に活躍した東京オペラ座が浅草オペラの中で先駆的な試みを行っていた重要な劇団であることを明らかにし、浅草オペラ史の再考を促した。

（c）演劇学に於ける浅草オペラ研究の促進
　これまで浅草オペラは音楽学の範疇で研究されることが多かったが、その演劇性を明らかにしたことで、日本に於ける近代劇確立史の中に浅草オペラを位置づけ、今後は演劇学に於ける浅草オペラの重要性と研究促進を認識させることができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
①中野正昭、乱歩とラン子―江戸川乱歩にみるレヴュー・ガールへの憧憬と拒絶―、文芸研究、査読有、第 111 号、2010、55-79
②中野正昭、浅草オペラの〈猥雑さ〉と〈大衆芸能〉の魅力、劇Ｄｏｒａｍａ、査読無、第 42 号、2009、8-10
③中野正昭、歌劇『椿姫（La Traviata)』検閲台本にみる浅草オペラの演劇性、演劇映像学 2008、査読有、第 2 集、2009、15-40
④中野正昭、天勝舞台の歌劇性、彷書月刊、査読無、280 号、2009、26-29

〔学会発表〕（計６件）
①中野正昭、浅草オペラにみるグランド・オペラ上演の試み―東京オペラ座を中心に―、日本演劇学会、2010 年 6 月 27 日、明治大学・駿河台キャンパス
②中野正昭、大正期浅草とイタリア・オペラ―東京オペラ座『椿姫』上演を中心に―、早稲田大学演劇博物館グローバルＣＯＥ演劇・映像の国際的教育研究拠点、2010 年 5 月 25 日、早稲田大学・西早稲田キャンパス
③中野正昭、浅草オペラ雑誌からみた宝塚《歌劇》への評価、共同研究拠点・演劇映像学連携研究拠点：公募研究「日本の「国民演劇」としての宝塚歌劇―19～20 世紀の日本大衆演劇・芸能の生成に関する研究・「興行」という視座から―」(研究代表者：細井尚子)、2009 年 11 月 7 日、早稲田大学・西早稲田キャンパス
④川崎賢子、桑原和美、中野正昭、山梨牧子、パネルディスカッション「近代の阪神間文化と宝塚歌劇」、日本演劇学会、2009 年 6 月 27 日、大阪市立大学
⑤中野正昭、ローシー・オペラと浅草オペラ、その〈連続〉と〈断絶〉―小松耕輔訳『椿姫』を中心に―、早稲田大学演劇博物館グローバルＣＯＥ演劇・映像の国際的教育研究拠点、2009 年 2 月 24 日、早稲田大学・西早稲田キャンパス
⑥中野正昭、浅草オペラの想像力―オペラ的でないオペラの魅力―、明治大学・国際浅草学プロジェクト、2008 年 11 月 24 日、明治大学・アカデミーコモン

〔図書〕（計１件）
①中野正昭、森話社、『ムーラン・ルージュ新宿座』、第一章「浅草オペラからインチキ・レヴューへ」、2011 年 9 月【刊行予定】

６．研究組織
(1)研究代表者
中野　正昭（NAKANO MASAAKI ）
明治大学・文学部・兼任講師
研究者番号：４０４０９７２７